

これで

勝負

倉庫や物流センターで段ボール箱など幾つもの荷物を積み上げ、まとめて輸送する際に使われるパレット(荷台)。さまざまな素材が使われているが、中でも軽さが特徴のプラスチック製を専門に手掛けているのが、日本プラパレット(上田市)だ。年間約250万枚を生産して物流業界を支えている。

パレットは積み上げた荷物の土台として使われている。フォークリフトのフォークの部分を差し込んで持ち上げ、そのまま移動させたり、トラックに積み込んだりできる。荷物を1個ずつ手で積み込むよりも大幅に手間が省ける。

このところ製品開発で着目しているのが、パレットが使われない時の保管方法だ。通常のパレットは1・1メートル四方、厚さ14センチで、10枚積み重ねれば高さ1メートル40センチになる。スペースが限られた倉庫などではかさばっていたという。

同社が昨年12月に発売した新製品「E X A—111111N」は、上のパレットの脚部分などが下のパレットの内側に入っ

荷物載せるプラスチック製の土台

日本プラパレット

(上田市)

収納効率化し輸送コスト減

て重なるように設計。10枚重ねても高さは65センチと通常のパレットの半分以下に収まり、効率的に収納できると説明する。荷物を運び終えた後にパレットだけを



収納に便利なパレットの新製品(手前)。従来のパレット(左奥)と同じ枚数を積み重ねても高さは半分ほどで済む

トラックで回収する際も、「載せるパレットの枚数を以前より増やせる」(山本社社長)。運ぶ回数、使うトラックの台数を減らせるため、輸送コストを削減できるという。パレットの強度を保つために、骨組みを増やすなど工夫した。工場では生産工程の大半を自動化している。樹脂を溶かしてパレットを量産する射出成形機は、全長10メートルもある大型機を使用。作業員の多くは品質チェックなどに配置している。

国内に投入されるパレットのうち、プラスチック製の割合は1割強。多くを占める木製は、重さが弱点だが、強度が高い。山本社長は「できる範囲で大半が木製から切り替わったが、これ以上のシェアを奪うのは簡単ではない」とみる。

そのため、各業界にまたがる顧客のニーズをつかんだ商品で販路の開拓を心掛ける。山本社長は「カタログを持っていて選んでもらうのではなく、顧客が欲しいと思う商品を開発して積極的に提案していく」と意気込んでいる。

日本プラパレット 1984(昭和59)年、プラスチック製のパレットを射出成形で造る「日本パレテック」として埴科郡坂城町に設立。上田市の現在地に移転後の97年、プラスチック製品製造の日栄化学工業(現D I Cプラスチック)

の一部事業を統合し、現社名に変更した。日本プラパレットによると、プラスチック製では国内シェア3割弱。工場は上田市のほか、栃木県佐野市にある。2015年3月期の売上高は約90億円。従業員は約160人。